

非名詞句主語の意味と一致の相関について

廣 川 貴 朗

1. 導入

英語には、一見名詞句ではない要素が主語（非名詞句主語）として現れる事例がある：

- (1) a. [CP that Shelby lost it] is true (Davies and Dubinsky (2001: 247))
- b. [PP under the bed] is a good place to hide (Davies and Dubinsky (2001: 247))
- c. [AP very tall] is just how he likes his bodyguards (Davies and Dubinsky (2001: 247))

また、等位接続された非名詞句主語は単数・複数一致を示すことが指摘されている：

- (2) a. That the march should go ahead and that it should be cancelled have been argued by the same people at different times.
- b. That UNO will be elected and that sanctions will be lifted {is/??are} now likely (McCloskey (1991: 564-565))
- (3) Under the bed and in the blanket {is/are} good places to hide. (Hirokawa (2021: 2-3))

2. 非名詞句主語の一致と解釈

先行研究において、CP 主語や PP 主語の一致に意味的側面が関与していることが指摘されてきた (McCloskey (1991), Moltmann (1997), Hirokawa (2021)ほか)：

- (4) The semantic condition governing such agreement seems to be that plural agreement is possible just in case the conjoined propositions are contradictory or incompatible, or, more generally, when they specify a plurality of distinct states of affairs or situation-types. When the coordinated clauses denote compatible propositions (that is, when they denote two or more propositions that jointly specify a single complex state of affairs or situation-type), then singular agreement is preferred or required. (McCloskey (1991: 564-565))
- (5) (2)は *under the bed and in the blanket* が単一の場所を表す状況で単数一致を示す (cf. Hirokawa (2021: 16))

しかし、これまで等位接続された PP 主語の単数・複数一致は体系的に調査されておらず、一致と解釈との相関も明確に示されてこなかった。また、上記の例では動詞の後ろに生起している名詞句との一致の可能性が残っている。本発表は、容認度判断実験を通して英語の等位接続された PP 主語の一致が PP 主語の解釈に左右されることを示す。

3. 実験

等位接続された PP 主語の解釈と一致との間に相関があれば、主語が「同一の重なり合った時・空間・様態」を指す場合とそうでない場合との間に容認度の差が生まれると予測される。

本研究は英語母語話者 40 名に対して、ターゲット文とその文脈を示す説明文のペアを提示し、5 段階のリッカート尺度を用いて容認度の回答を求める実験を実施した。ターゲット文は単数一致・複数一致の 2 タイプ、説明文は等位接続された PP 主語が単一の重なり合う時・空間・様態を表す文脈を示すものと複数の別個のものを表す文脈を示すものの 2 タイプからなり、これらの組み合わせにより計 4 タイプの提示文を用意した。

- (6) a. 重複コンテキスト×単数一致：重複×単数タイプ
例 [Context: My dogs have created a cozy spot under the bed, where they are wrapped snugly in an old blanket.] Under the bed and in the blanket is for my dogs.
- b. 重複コンテキスト×複数一致：重複×複数タイプ
例 [Context: Rising water threatens areas near the river and sea.]
Along this river and near the sea are in danger of flood.
- c. 非重複コンテキスト×単数一致：非重複×単数タイプ
例 [Context: Our team will have two meetings today.]
At 10 a.m. and at 3 p.m. is perfect for meeting.

- d. 非重複コンテキスト×複数一致：非重複×複数タイプ

例 [Context: Sandy sometimes dreams of living near the beach and sometimes thinks about living in a mountain cabin.]

Along the coast and in the mountains remind me of Sandy's retirement fantasies.

また、動詞後の名詞句との一致の可能性を排除するため、述語は他動詞用法のみの動詞、形容詞もしくは前置詞が後続する *be* 動詞に限定した。

各タイプ 8 文ずつの実験文を 2 つのリストに分割し、それぞれのリストにフィラーを 32 文加え、計 48 文を提示した。得られたデータが正規分布を示すか否か Shapiro-Wilk 検定にて確認し、正規分布を示す場合は *t* 検定、正規分布を示さない場合は Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて有意差を確認することとした。

4. 結果

各タイプの容認度の平均値と容認した参加者の割合は、(7)の通りであった。

- (7) a. 重複×単数タイプ： $M=2.304$ ($SD=.859$, $N=35$), 容認割合 34%
b. 重複×複数タイプ： $M=2.893$ ($SD=.823$, $N=35$), 容認割合 58.5%
c. 非重複×単数タイプ： $M=1.807$ ($SD=.713$, $N=35$), 容認割合 17.1%
d. 非重複×複数タイプ： $M=2.714$ ($SD=.796$, $N=35$), 容認割合 52.8%

Shapiro-Wilk 検定の結果、全てのタイプが正規分布ではなかった ($p<.001$)。Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて各タイプの比較をした結果、重複×単数タイプと非重複×単数タイプ間 ($W=74.5$, $p<.001$, $r=-.35$), 非重複×単数タイプと非重複×複数タイプ間 ($W=550.5$, $p<.001$, $r=-.33$) のそれぞれに統計的に有意な差があった。

5. 考察

上記結果より、重複×単数タイプと非重複×単数タイプ間の容認度の差と非重複×単数タイプと非重複×複数タイプの間の容認度の差は統計的に有意であるといえる。(7a, b)の差から、単数一致の場合に PP が表す対象が重複する解釈の容認度が上がると言える。また、(7c, d)の差から、PP が表す対象が重複しない場合、単数一致の容認度が下がると言える。この結果は等位接続された PP 主語の解釈と一致との間に相関がある場合の予測と合致する。

本実験の結果からいくつかの疑問が生じる。第一に、単数一致よりも複数一致の容認度が全体的に高いのはなぜか。等位接続された CP 主語は単数一致が優位であるのに対して、PP 主語は複数一致が優位であることが示唆される。第二に、単数一致タイプの重複・非重複コンテキスト間の容認度の差が小さいのはなぜか。第三に、コンテキストの違いと一致の可否との間に相関があるのか統計的に検証する必要がある。最後に、各タイプ内でも例文の容認度に大きなばらつきがあったことから、容認度の高い例・低い例の間にどのような違いがあるのかという疑問が生じる。こうした課題は今後の研究にて明らかにしたい。

6. 結語

容認度判断実験を通して、等位接続された PP 主語の一致が解釈に左右されることを示した。また、得られた結果から生じる新たな疑問および示唆を示した。

注：会場にて貴重なご質問・ご助言をくださった先生方に感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP24K16092 の助成を受けたものです

参考文献（一部）

Davies, William and Stanley Dubinsky (2001) *Objects and Other Subjects: Grammatical Functions, Functional Categories, and Configurationality*, ed. by William D. Davies and Stanley Dubinsky, Kluwer. McCloskey, James (1991) "There, It, and Agreement," *Linguistic Inquiry* 22, 563-567. Moltmann, Friederike (1997) *Parts and Wholes in Semantics*, Oxford University Press, Oxford/New York. Hirokawa, Takaaki (2021) "On Agreement of Non-nominal Subjects," *Explorations in English Linguistics* 35, 1-28.